

एका चरे खगविसाणकप्पो

世界漂流

五木寛之



集英社

एको चरे खगविसाणकप्पो

世界漂流

五木寛之



集英社

世^せ界^{かい}漂^{ひょう}流^{りゅう}

一九九二年 六月 九日 第一刷発行

著 者 五木寛之^{いつきひろゆき}

発行者 若菜 正

発行所 集英社

三 五 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

編集部 (〇三) 三三三—〇一六—一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三三三—〇一六—三九三

制作課 (〇三) 三三三—〇一六—〇八〇

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社制作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次

最新モスクワ漂流日記	5
イスタンブール小景	67
ワルシャワぶらりぶらり	91
現代北京かけ足紀行	129
エルミターージュ詣で	167
東ベルリンの雪いずこ	189
インドの闇を読む	209
あとがき	276

装 画
丁 五木玲子
三 村
淳

世界漂流

最新モスクワ漂流日記

一九九二年二月下旬。

この日付けが重要なのだ。世界の情勢は日一日と、ものすごい速度で変化してゆく。一週間ちがえば、もう別世界の話になる。三日先のことは誰にも予測がつかない。それが世紀末というものだ。

一九九二年冬。

二月二十日から三月二日までの十二日間の旅。

それは文字どおり「私を震撼しんかんさせた十二日間」だった。世界のことなんかはどうでもいい。自分自身が驚き、呆れ、感激し、絶句したロシアの旅である。

ロシアとは言わないほうがいいだろう。正確にはモスクワとサンクトペテルブルグだ。『ペテルブルグからモスクワへの旅』というのは有名なラジシチェフの古典的名著だが、私ののはそれとは似ても似つかないトランジットの旅である。したがって私が見たものは大星雲の百万分の一にもあたらぬ現代ロシアの破片かもしれない。暗黒のなかで巨大なシベリア象の尾っぽの匂いをかいただけとも言える。

しかし、私は見た。この目で眺め、手で触れ、舌であじわった。それがどんなに部分的な現象であれ、私の体験したものは実在したものにはかならない。たとえそれが幻だったとしてもである。

ロシアは飢えているか？

ニエート。断じて否である。

ロシア人は可哀相か？

ニエート。彼らは決して同情されるべき哀れな人々ではない。

ロシアの都会にはモノがないか？

これもニエートだ。

もちろん流通の大混乱の中で確かにないものは多い。しかし一九九二年二月から三月にかけてのモスクワやサンクトペテルブルグの国営商店の陳列棚には、なぜか私が訪れたとき、ジャガイモと、ソーセージと、魚があった。自由価格商店には、もちろん、ないものはない。ゴルフボールさえあったのだ。街で行列を見かけて近づいてみると、それは外国高級店ランコムのも華麗なブティックに入店しようとひしめきあう市民たちの群れだったりもした。

「チューインガム・ダヴァイ！」

と、あたりをうかがいながら小声でささやきかける幼い子供たちもいた。しかし、その彼がアディダスの洒落たシューズをはいていることもまた事実だった。

モスクワでは夜の競馬に熱中する観衆がいた。誰も馬を殺して食ったりはしていない。劇場もオペラ座も超満員だった。

ロシアは決して飢えてはいない。たとえ日用品や食料が決定的に不足しているとしてもだ。なぜそう感じたかを書くことにする。

ロシアへ行く、と私が言ったら、誰もが眉をひそめてこんなふうな反応をしめた。それは本当に皆が皆、おなじような反応だった。

「いまのロシアは大変らしいじゃないですか。大丈夫かなあ。しばらく様子をみてからにしたほうがいいと思うけど」

「食う物が全然ないんでしょう？ それに二月には市民の暴動や保守派のクーデターもありそうですよ。内戦にでもなったらどうします？」

「ホテルに暖房ははいってるんですかね。とりあえずホカロンとインスタント・ラーメンを山ほど持っていくことですか」

全員がいかに痛ましい犠牲者を見送るかのごとき顔をするのである。なかには調子がいいのもいて、

「目がくらむような美人の娼婦が二百ドルですってね。やっぱり色の白いののは白ロシアのほうですか」

などと阿呆なことをぬかす国辱男もいた。

いずれにせよ、ほとんどすべての連中が本気で心配してくれるのだ。いまは時期がわるいから延期したほうがいい、と、身をのりだして忠告してくれる自称ロシア・ウオッチャーもいた。無理もない。今年にはいつから新聞や雑誌は、こぞってロシアの最悪の冬を報じていた。

テレビは特にすごかった。連日ブラウン管に流れる映像は、悲惨な食糧事情にあえぐロシア市民の表情をうつし続けてうむことがなかった。テレビによわい日本国民のほとんどが、ロシアに地獄のようなイメージを抱いていたとしても当然だろう。もちろん程度の差こそあれ私自身も例外ではなかった。エリツィンはこの冬を乗り切れるか、という週刊誌のアンケートに答えなかったのも、はつきりした見通しが立たなかったせいである。

天井知らずのインフレと経済・流通の混乱、そして旧体制派のサボタージュに社会モラルの劇的な低下とくれば、誰でもがロシアに最悪のシナリオを思い描くはずだ。出口なし、というのが、あらゆるジャーナリズムの固定した視点だったと言っている。

寒空に行列する人々。からっぽの国営商店のケース。老人や年金生活者の暗い顔。そして娼婦と浮浪児たち。それがテレビや報道写真がうつしだすロシアのすべてだった。こいつはおかしい、と頭の奥に点滅するものがある。湾岸戦争初期のオイルまみれの水鳥のシーンと妙に似てるじゃないか。

あの湾岸戦争のときのテレビの報道のしかたといったら、ひどいものだった。画一化、とい

う言葉があれほど実感されたことはないだろう。

最近になって、あの重油まみれの水鳥の映像について、いろんな噂がささやかれはじめている。しかし、この文章の最初に書いたように、〈日付けが重要〉なのだ。その時、そのタイミングですべてがきまる。哀れな水鳥のワン・ショットは、あらゆる冷静な論評にまさる威力を発揮した。極悪人フセインのイメージは、その時点で世界中に定着したのである。あとであれこれ言っても、意味がない。テレビはへただの現在にすぎないのだ。

私はこの一年間の激動のロシアを報ずるテレビの視線に、ぜんぜん納得のいかないものを感じている。ロシアは地獄である、ロシア人は悲惨である、ロシアに明日はない、という画一化されたイメージを死守するために、営々としてフレームを固定しつづけているようにさえ思われてならないのだ。

視角を一点に固定し、それを拡大再生産する立場にたてば、あらゆることが可能になるだろう。数年前、札幌では生活苦のために餓死した母子がいた。この経済的繁栄と物質的過剰の頂点にある現在の日本においてである。地獄なんてものは、その気になって血眼でさがせば、身のまわりのどこにだって存在するのだ。

私はつい数日前、サンクトペテルブルグからヘルシンキを経てストックホルムに着いた。高度福祉社会のお手本のように言われるスウェーデンにも、思わず目を伏せたくなるような悲惨さはあった。私はたしかにそれをこの目で見た。たとえごく限られた一部の現実であったとし

でも、地獄の存在しない国なんてものは地上にあるわけはないのである。ましてや、第三世界と称されるアジア、アフリカ、ラテン・アメリカなどの国々においては、地獄はロシアの百倍も濃いといっている。アメリカだって地獄の匂いがする。インドはさらに深い夜を抱いていたし、地上の楽園のように言われる南海の諸島や、オーストラリアもまた出口なしの現実にもちていた。

ロシアにはモノが無いだって？ 人々の生活が苦しいだと？ 私が住んでいる横浜、ベイ・ブリッジやエキゾチックな雰囲気売りものの洒落たこの街にも、ロシア以上の貧困と悲惨はあるのだよ。

モスクワの年金生活の老人たちの苦しみの十倍も荒廃した老人収容所の現状を、きみは本当に知らないのか。この日本においてさえも地獄はすぐ身近かに存在する。まして激動のロシアにおいてをや。

観念的な床屋政談はよそう。私とてもの書きのはしくれである。見たまま、体験したままを逐一描写する中から、読む側が自分自身でロシアの現実像を選びとれば、それで十分ではないか。なにも声高に叫ぶこともないだろう。

一九九二年二月下旬、私は単身、成田国際空港からモスクワへ飛び立った。JAL四四一便東京発、モスクワ経由、パリ行き旅客機である。

目的地モスクワまで八千二十五キロの距離をこの機は九時間三十分で一気に飛ぶ。二時間後にアムール河上空をへて、七時間二十二分後にウラル山脈をこえれば、たちまちモスクワだ。

JALを選んだところに、還暦をまじかにひかえた私の弱気がある。かつて一九六五年、いまをさる二十七年前にモスクワへむかったときは、船と、鉄道と、旧ソ連邦の飛行機とを乗りついでる青年の旅だった。横浜の港を、バイカル号で出帆してシベリアを鉄道で走り、さらにアエロフロートでモスクワへ着いた。当時の旅客機は、まだジェット機ではない。ツポレフ一四型というプロペラつきのターボプロップ機である。

現在はイリュージン六二Mという高性能機が就航しているが、〈青い白鳥〉という優雅なニックネームをもつその機種でも、モスクワまではJALとくらべて約一時間弱のハンデをもつらしい。

帯状の白い流水を見おろしながら、サービスのシャンペンをのむ。東京の地上温度十度、モスクワはマイナス四度との機内アナウンス。

どうやら予想したほど寒くはなさそうである。なんとなく、ちょっと肩すかしをくらったような感じ。

なにしろ、その前々日まではハワイにいたのだ。マウイ島で火ぶくれするほど灼けた肌のまま、モスクワへ飛ぶのである。時差は平気なのだが、温度差が不安だった。二月はじめのサンクトペテルブルグの夜は、まれに零下四十度を下回ることもあるという。二月下旬とはいえモ

スクワだって相当な寒気を覚悟せねばなるまい。しかも空港や駅やホテルで、暖房がとまる最悪のケースも想定しておく必要がある。

と、いうわけで、私は思いきり重装備で機上の人となったのだ。パンツの上に重ね着たカシミア混紡のモモヒキが、じつとりと汗ばんで、すこぶる居心地がよろしくない。トイレにいった脱ごうか、それともモスクワまで我慢しようかと迷っている間に、いつのまにやらついうとうとと眠ってしまった。JALの大型ジェット機は、機外温度マイナス四十五度の高空を音もなくすべってゆく。

灰白色の大地が傾きながらせりあがってきた。シエレメチエヴォ空港だ。二十七年前に私がTU一一四で到着したのは、ここではない。あのときはハバロフスクからドモジエドヴォ空港へ着いたはずである。

このシエレメチエヴォ空港は、モスクワ・オリンピックのときに作られた国際空港だという目下、ロシア最新最大の規模を誇っているらしいが、見た目にはすこぶる野暮ったい工場のようなターミナルだ。

入国手続きは、なぜか拍子ぬけするほどスムーズだった。まだ十代ではないかと思われるような紅顔の少年管理官が実直な態度で旅券を確認し、簡単に入国のスタンプを押す。服装もちゃんとしているし、態度も偉そうではない。笑顔も見せないかわりに、特に無愛想というので